

氏名（本籍）	鶴殿 えりか（悦子）（茨城県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第2678号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	トニ・モリスンの小説における 物語の枠組みと三角形のきずな
主査	筑波大学 教授 文学博士 鷺津浩子
副査	筑波大学 教授 博士（文学） 宮本陽一郎
副査	筑波大学 教授 Ph.D. 竹谷悦子 (アメリカ文学)
副査	城西国際大学 元教授 風呂本惇子

## 論 文 の 要 旨

本論文は、アフリカ系アメリカ女性作家トニ・モリスンの小説テキストを、《物語の枠組み》、そして弱者どうしの《三角形のきずな》という観点から分析するものである。《物語の枠組み》に関しては、モリスンの創作絵本がイソップ寓話を下敷きにし、その物語のメッセージを換骨奪胎しまったく別のメッセージへと作り替えるという構成であることを手がかりにし、彼女の小説においても同じことが行われているのではないかという仮説を出発点とする。《三角形のきずな》に関しては、モリスンの小説のテーマが弱者どうしの強いきずなであることを確認し、そうした弱者どうしの双数的な関係が第三者の存在により、どのように介入され、どのように外部の世界へと接合されるかを辿ることを目的とする。

第一部、「第一章 裏切りとセクシュアリティ——『青い眼がほしい』」においては、幼児用教本『ディックとジェイン』および映画『模倣の人生』が物語の枠組みであるかのように設定されているが、より重要な物語の枠組みはネラ・ラーセンの小説『パッシング』と別のハリウッド映画であり、セクシュアリティを背景に三人の少女の間で繰り広げられる階級闘争がこの小説のテーマである。

「第二章 閉ざされた水の下への欲望——『スーラ』」においては、『スーラ』を「レズビアン小説」と呼んだバーバラ・スミスの議論を援用し、スミスが指摘する「レズビアン小説」であるのは「表現された感情」においてのみである点を、この小説は果敢にレズビアン・セクシュアリティを描きだそうとしていると論じる。

「第三章 三角形の欲望——『ソロモンの歌』」では、ミルクマンの旅が一見そう見えるように英雄ソロモンを求める旅ではなく、自らの本当に愛する者を見いだすための旅であることを、イブ・コゾフスキー・セジウィックの欲望論を参考にしつつ検証した。

「第四章 赤ずきんちゃん気をつけて——『タールベイビー』」は、隠された物語の枠組みは、題名にある「タールベイビー」ではなく、民話「赤ずきん」であることを証明する。しかし、この「赤ずきん」の物語の枠組みも、最終的に別の物語へと作り替えられ、「レズビアン連続体」というテーマに接合している。

「第五章 ブラック・ガール、ホワイト・ガール——「レシタティーフ」」では、初期と中後期の小説のちょうど中間に位置する、モリスン唯一の短編小説「レシタティーフ」を扱う。この短編小説では、中後期の小説の特徴である人種・歴史のテーマの前景化が顕著であることが指摘される。

第二部、「第六章 語るもの／語りえぬもの——『ビラヴィド』」では以下のことを主張する。『ビラヴィド』の物語の枠組みはスレイヴ・ナラティヴであるが、スレイヴ・ナラティヴの枠組みを使いながらも、その画一的な語り口は修正され、このセサによる饒舌な語りとビラヴィドの沈黙の語りという二つの特徴的な語りの対立的な構図、すなわち、「語るもの」と「語りえぬもの」の構図が明らかになる。

「第七章 反復・変奏／変装・誤読——『ジャズ』」では、歴史的事象が背景にありながらそれが直接的に提示されるのではなく、ジャズのリズムが『ジャズ』における物語の枠組みを構成していることを明らかにする。

「第八章 ルビーの血／エメラルドの水——『パラダイス』」では、『パラダイス』におけるいくつかの二項対立の構図に着目する。さまざまな対立の構図は徐々に脱構築され、もともとの枠組みは無効化される。これとともに小説の最後では、双数的な母と娘の関係が新しい関係の局面へと開かれていく。

「第九章 廃屋のカナリア——『ラヴ』」では、家父長の圧力の下で長い間憎み合ってきた二人の女が、第三の女の介入により本来の愛情を回復し、同時に、彼女たちの陰に隠されていたもう一組の女たちの愛の物語と輻湊することを解明する。

「第十章 家父長制、奴隷制、母と弟——『マーシィ』」においては以下を考察する。『マーシィ』では幾組かの母娘関係において母と娘の思いは完全に断絶している。唯一希望を見いだせるのが、語り手フロレンスとドーター・ジェインとの関係である。ジェインは物語の主筋にはまったく関係のない第三者であるが、彼女の存在により閉じた物語世界と外部世界との確かな繋がりが暗示されていると指摘する。

以上のように、フォルムとしての《物語の枠組み》とコンテンツとしての《三角形のきずな》が、複雑に絡み合いそして呼び交すことを通じ、トニ・モリスンの諸作の語りが独自の文学世界を構築し、とりわけ後期の作品において合衆国の正史を書き換えていくものとなっていることを、本論文は明らかにするものである。

## 審 査 の 要 旨

1993 年黒人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスンについては、これまでアメリカ本国だけでなく日本でも多くの研究がなされてきた。とはいえ、これらの研究のなかには、黒人および女性の弱者としての立場を前面に押し出すあまり、その物語性に十分な考察を与えていないものも少なくない。本論文は、ともすれば黒人／女性問題に還元されがちなモリスンの物語性に焦点を当てたものとなっている。

本論文が画期的であるのは、小説のフォームとしての《物語の枠組み》とコンテンツとしての《三角形のきずな》について論じながら、その両者があいまってモリスンの物語性を構成していることを、入念な作品分析を通じて明らかにしている点である。《物語の枠組み》という概念によって、モリスンの小説が各種のおとぎ話や民話や歴史を枠組みとして用いながらも、それを換骨奪胎して別の次元の物語を現出させる手法を分析すると同時に、そのインターテクスチュアリティの揺らぎを論じる。また、《三角形のきずな》という概念によって、これまで弱者どうし二者の結びつきと考えられていたものに、第三の登場人物を配する意味が解析され、不安定ながらもより次元の高い連帯が具現化されていくと論じている。このようにフォームとコンテンツの両面からモリスンを読む立論は、高く評価することができる。また、その主要作品をほぼ網羅的に論じた本論文は、わが国における今後のモリスン研究の新たな基礎となるものであり、その学術的価値はきわめて高い。

このような意義を持つ本論文にあえて問題点を探すとすれば、作品世界に寄り添った入念な作品分析に徹するあまり、各章のつながり、そして《物語の枠組み》と《三角形のきずな》という二つの論脈のあいだのつながりが、埋没しがちである点を指摘せざるをえない。また、細部に散見される記述上の問題を改善することが求められる。

しかし以上のような問題点は、本論文の意義を減ずるものではなく、博士論文として十分な力量を示すものと判断する。

平成 25 年 12 月 21 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。